

リスニングとは—— より上位のコミュニケーション活動の一部として行われる行動

1. 聞くことの役割

「コミュニケーション活動の中で最も基本的な役割を果たしながら、同時に他技能の習得を助け、他技能を制御し、そして他技能の効果を高める脇役的役割まで果たしている」

- ・発話モデルの採り入れ口

- ・聞いて制御

私たちは、常に自分の発音、発話をモニターし、制御している (delayed feedback speech)
つまり、聞けない、ということは正確な発音、発話が出来ないということにつながる

- ・発信のための不可欠な要素

相手の発言を聞き取って、適切な発話をする (コミュニケーション活動)

2. 音声言語コミュニケーションのプロセス

単に聴覚を利用して聞こえてくる音を順に受け入れるだけではない

語と文法の解読能力だけでは全く不十分

- ・開回路フィードバック (open-circuit feedback system)

「情報の解釈が人生経験のすべてを通して行われる」 / 「聞き手が話し手の話し方を制御する」

ノイズ=物理的/心理的/生理的/神経的/言語的/意味的/文化的/ノイズ

また、

方言による差/不注意による誤りなどさまざま。

話す速度も速いため、変化/脱落/挿入/置換が行われている

→200語/分程度 (: 1秒3~4語、10~15種の音が発音されている)

↓

- ・言語の構造はノイズが混入してもある程度対応できるようになっている。

記号としての言語構造はその **75%**が余剰を含んでいるからこそ。

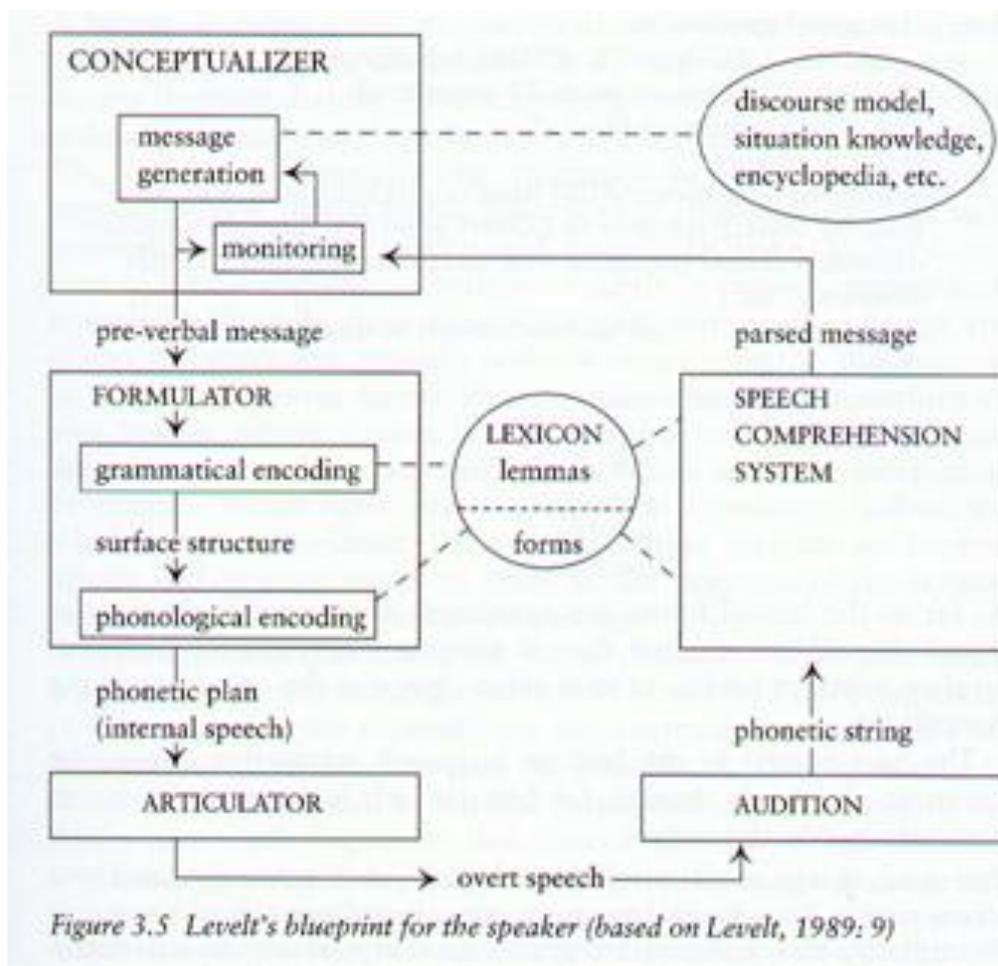
- ・「母音や子音等の、語を構成する音声だけでなく、他のチャンネル、つまり韻律や体言語、感情、それに発想法などを通しても伝えられている」

→

- ・言語活動(特に聴解)における音声情報の「ボトムアップ処理、トップダウン処理、両者の編集の必要性」

3.リスニングのプロセス=聴解とは何か？

- Levelt : 「音声学、言語学、心理言語学的レベルでの情報の処理過程」



• Lynch (1998)

- リスニングのプロセスを次の3つに分けて解説。

音声認識 / 記憶器官の働き / 談話の理解

- 並列分散処理 (parallel distributed processing) : 実時間での発話処理。聞き手の参加度を大きいものとする。

• Vandergrit (1999)

リスニング=「聴解とは決して受動的な行為ではない。それは、まず聞き手が音声を識別し、語の意味や文法の構造を理解し、さらにストレスやイントネーションを解釈して、これらすべてを保持したうえで、その場の環境のみでなく、社会的、文化的環境を観察しながら発話を解釈するという、複雑で能動的な行為である。」

・聴解=3手法で音声情報の処理を行っている。

1) ボトムアップ処理

小さな単位(弁別素や音素)から大きな単位(単語やフレーズ、センテンス)へ

2) トップダウン処理

大きな単位(既存の知識、話の流れや雰囲気など)から不完全な形で入力される小さな単位を確かめる

3) 編集処理

両手法を高速に交互に組み合わせる

・リスニング能力習得へのハードル

・母語と外国語学習の時間の違い

毎日実践できる時間：母語 **8時間** vs 外国語およそ **20分**

・L1がL2聞き取りに与える影響

獲得類似感覚

/l/ と /r/, /b/ と /v/, /f/ と /h/

獲得相異感覚

・学習者の学習動機が低い

ある程度のコミュニケーション維持には最低 7000語～8000語必要。

(高校卒業時平均 2000語)

5. リスニング指導のストラテジー

(1) 最少対(ミニマルペア; minimal pair)による聞き取り訓練

(2) 音変化の聞き取り訓練

(3) スクリプトを見て聞く訓練

(4) 発話速度を遅らせて聞く訓練

(5) 人工的にポーズを入れて聞く訓練

(6) 繰り返し聞く訓練

(7) シャドーイングによる訓練

(8) クローズテストによる訓練

(9) ディクテーションによる訓練

(10) 焦点を絞って聞く訓練

(11) バーボ・トータル・メソッド (the verbo-tonal method)

以上 11 手法は「リスニング指導では、我々はいまだに教えるというよりはテストをしている」(Field, 2002) に代表されるような問題が指摘されている。＝リスニングの指導法は存在しない。

↓

1960 年代後半から：1) Pre-listening 2) Listening 3) Post-listening

1960 年代後半には、以上 3 段階が

1) 重要語彙の指導 2) 繰り返しの聞き取り、一般的質問 3) テキスト中の言語の分析と反復練習

最近(Field, 2002)

1) 環境の設定、動機づけ 2) 繰り返しの聞き取り、タスクの実践、解答の確認 3) 言語機能の調査、語意の推論

⇨ (Vandergrift, 1999)

1) 立案 2) 聴収 3) 評価

Strategy-Based Approach (Mendelsohn, 1998)

学習方法について指導することを重視する指導法

学習者にどう聞くか指導する

教師の役割は、聴解活動に際して必要な方策の使用法を順に学習者に指導していくこと

しかし

Field (2002) 「聞き取りの指導法は大きく変わったが、その変化の多くは表面的で、本質的なものではない、また、真に必要なものはリスニングの授業の目的とその中身 (構造) の再考であると指摘するものもあるだろう」

Lynch (2002) 「言語教師のための、より効果的な教材および指導法開発の必要」

→机上の空論が多い

竹蓋幸(1989, 1990, 1997)

総合力としてのリスニング

具体的な教材化実践、使用効果検証

基本問題

(1)聞くことの役割を4種挙げなさい。

コミュニケーション活動の中で最も基本的な役割(言語情報を聴覚を通して入手)を果たしながら、同時に他技能の習得(発音、発話モデル)を助け、他技能を制御(自分の発話、発音をモニター)し、そして他技能の効果を高める(コミュニケーションに不可欠な要素)協役的役割まで果たしている。

考察

授業では、リーディング・ライティング・リスニング・スピーキングの4技能、難しい順は？ということについて議論した。その話の中で一番印象的だったのは、皆が皆スピーキングが一番難しい、苦手ということだ。しかし、先生がおっしゃるにはリスニングが最も難しいという。初めはこの事実には驚いた。がすぐにひとつの認識のズレを感じた。それは、想定しているその技能を使用する場面である。きっと私をはじめ学生の皆はリスニング＝受験やTOEICのリスニングを想定しているだろう、または、日本で外国人とやり取りするときだ(この場合、大抵会話には文脈やジェスチャー、英語の話し手がどこの国の人かなどの要因で、聞き取りやすくなる)。一方、先生は、学会の発表時の質疑応答の場合や、BBCなどのニュースを聞き取ることを想定している。おそらく、今までの英語との付き合い方(受験で必要など)がその認識に深く影響しているのだろう。もっともって俯瞰的に英語を捉えられると素敵だと思う。この話は英語学習モチベーションに密に関連している。日本という国で日常的に英語(をはじめとした外国語)は必要に迫られることはない。日本語が分かっていたらほぼ快適に不自由なく暮らせる。英語の学習動機——モチベーションが日本人学習者に稀薄であることの由縁の一つだ。英語を話せるようになりたい、とっていた私だが、結構と日本での語学学習のお風呂にどっぷりと浸かっていたのかもしれない、もう少し生徒さんたちが、外国語学習者が広い視野で英語を学べるようにすることが必要だろう。

さて、議論が今回の章のテーマ、リスニングから外れてしまった。話を戻そう。リスニングはどう学ぶことが、指導することが有効なのか。教科書ではいろいろな方法を紹介していた。そのなかでも、バーボ・トナル・メソッドとはいったい何なのか、もっと調べていこうと思う。あるサイトにはこう書かれていた。まず、このメソッドの概略である。

ヴェルボ・トナル・システム (Verbo-Tonal System, 言調聴覚論, 以下 VTS) とは、クロアチア共和国 (旧ユーゴスラビア) 生まれのペタル・グベリナにより提唱された理論体系であり、リズム、イントネーション等の言語の調子や聞き取りを重視した言語教育理論の総称を指す。その意味内容を込めて日本語訳で「言調聴覚論」と命名されたものです。

聴覚及び言語に障害のある者、並びに外国語(第2言語)の習得に対して、その目的

に応じて言語や音声の訓練及び指導をする教授法の一体系です。

VTM (母国語教育) と, SGAV (外国語教育) の両面に応用され, 前者を「言調聴覚法」(ヴェルボ・トナル・メソッド: Verbo-Tonal Method), 後者を「全体構造視聴覚方式」(スガヴ方式: Structro-Global Audio-Visual Methodology) とする2系統があります。

では、次にもっと詳細に見ていこう。

バーボ・トナル・メソッド(以下、VT 法)は 1950 年代、ペタル・グベリアによって開発された。生きた言葉を教える方法である。教科書にも、周波数を変えて集中して聞き取りやすいようにしているとあった。——低い周波数にするのだ。低い周波数はリズムやイントネーションをよく伝える。私たちが音声言語でコミュニケーションをとる際にもリズムやイントネーションは大きな役割を果たしている。

そして VT 法は次の 3 つのことを重視している。

1. 音声言語とその聞き取りを重視する。
2. 体の運動は音声言語の原点であるとする。

VT 法は「弛緩と緊張(slack and stiff)」の概念を用いて身体の運動と調音の関係を説明することに成功しており、学習者の抱える問題点と教師の行うべき指導がこれらの概念で統一的に説明される。ただし、精神的緊張・筋肉の生理的緊張・音韻論的緊張のいずれもが調音時に関与するため、弛緩と緊張を定義することは容易ではない。静止は動きの一部となり、主観的にリラックスした静止と緊張を伴う静止の区別も行われる。「緊張は経験を通して感じられるものである。教師の仕事は、生徒に音声的緊張と弛緩を感じさせることである(ロベルジュ 1995:127)

3. 音声言語の韻律的特徴を重視する。

[l] と [r] や [v] と [b] に代表される単音の指導に比べ、分節できない(suprasegmental)リズムやイントネーション等の韻律的特長(prosodic features)は指導の困難さから後回しにされがちである。VT 法による発音指導ではこれを自然なコミュニケーションのために優先し、身体リズム運動やわらべうたのリズムを活用しながら、より自然な音声を導きだすよう工夫している。古くから親しまれているわらべうたは生き生きとしたリズムを持つものが多いため、これらのメロディを取り去り、わらべうたリズム(nursery rhyme rhythm)として積極的に利用する。状況に応じて喜怒哀楽を伴った情緒性(affectivity)ある表現を取り入れたり、低い周波数のみを通させるフィルタ(LPF)を利用してプロソディのみに注目させたりする工夫も行われる(Figure 1, Figure 2)。帯域フィルタによって効果的な音声を提示する SUVAG 機器も開発されている。木村(1997b)を参考に「伝承わらべうた」の不足を補う「創作わらべうた」教材を作成することもできる。

VT法はいろいろな場面で使用されている。私が調べたところでは、言語障害児、日本語教育などであった。

はじめに、言語障害児、なかでも聴覚障害児に応用する方法。残存聴力を活用する。聴覚使用概が重くても、低い周波数に対しては聴力が残っていたり、振動なら感じるという子どもが多いからだ。うまく音声言語を教えて、社会の一員に育てるべく、体を使ってリズム、イントネーションを覚えさせる。音声言語が生きたことば、つまり本来身体全体をつかって話しているからだ。また、リズムカルな文(わらべうたリズム)を使っている。子音や母音の発音はうまくできるのに、話し方がぎこちない、感情が十分に伝わらない子どもは、リズムやイントネーションが上手くできていないことが多い、そこでこのVT法が有効なのだ。

次に、教科書で挙げられていたような方法とは程遠いやり方だが、非常に興味深い研究、があった、日本語音声教育に応用する方法だ。石垣恵里子・斉藤明子(神戸YWCA)・長井克己(関西外大)の研究である。

中国人に5か月間、月2回の全12回、緊張から来る不自然さが多く見られたので、主に緊張を取ることによって日本語らしさを意識させることを主眼とした指導を行った。

学習者は中国海南省出身20代後半の男性。1997年6月来日、1ヵ月半の日本語集中講座受講(初級)。同年8月から日本企業(コンピュータ関係)での研修、1998年3月帰国。日本語の環境としては、住居は各国研修員の住む寮で、使用言語は中国語か英語。研修先の企業では休憩時間に日本語で話す程度。日本人の中で日本語を用いて生活している状況ではない。

回	指導	学習者の発音
1	挨拶を用いた山の意識・拍・弛緩	力んだ、固い、一本調子の声
2		
3	会話を用いた山の意識・拍・弛緩	力みがだんだん抜けてきたがまだ固く、力が入る
4	ささやき声を用いた弛緩	疑問詞の頭などが強い かなりなめらかさが出てきた
5	撥音(両足を突っ張って立っていたので膝を曲げて弾むと「えん」がうまく発音できた)	のどに力が入った「ん」
6	長い文末を一息で言わせる(～していただけないでしょうか)	うまくいかなくて繰り返すと、緊張が増す
7	全体の指導から単音の矯正へ移行・母音の無声化等	自分で気がつき、直すことができるようになる
8		
9	弛緩(手の位置を下げる・手のひらでなく、指一本で・手を真下へ下げて脱力させる・手首をぶらぶらさせる)	少し力みが戻ってしまう 声が大きくなると力んでしまう
10		
11	弛緩	文字に頼ってしまう(教材のレベルが合わなかったため音読になってしまった)
12		「手の動きと発音の結びつきが実際に体感できた」との発言

指導後わかったこととしては、学習者に緊張から来る不自然さが多く見られたが、人によっては弛緩から来る不自然さが多いケース、また緊張弛緩の入り交じるケースもあるということだった。

以上、リスニングでもなく、もはやスピーキングに関することであったが、VT法はいろんな技能の向上に役立てられるようだ。

話を元に戻す、冒頭で述べたが、私はリスニングに対する考えが、認識がずれているのかもしれない。実際にネイティブが聞くような英語を、と思いディズニーの有料放送で放映されている教育番組やアニメを英語で視聴してみた。幼稚園くらいの子どもが見るような教育番組は、字幕がなかったが、大体起こっていることはわかった。動詞や名詞の内容語は割と聞き取れたし、画面で起こっていること、目からの情報がすごく理解を補ってくれている感じがした。一方、アニメの方は、早口でほとんど聞き取れなかった。先と同じようにところどころ内容語は聞き取れたが、字幕がないと理解するのはきっと困難だろう。状況というものがいかに大切なのか改めてわかった。サイドになってしまうが、やはり受験や英検のリスニングにとどまらないものを教えるべきなのだと思う。

○参考文献

- ・ VT 法を用いた日本語音声教育の実践報告

石垣恵里子・斉藤明子(神戸YWCA)・長井克己(関西外大) (発表年不明)

URL: <http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~nagai/papers/kn1/kn1.htm> (確認 : 2014.05.24)

- ・ The verbo tonal method

[http://verbotonal.utk.edu/Verbotonal/Resources_files/The%20Verbo-Tonal%20Method%20\(scan\).pdf](http://verbotonal.utk.edu/Verbotonal/Resources_files/The%20Verbo-Tonal%20Method%20(scan).pdf) (確認 : 2014.05.24)

- ・ Verbo tonal method とは？

<http://www.d2.dion.ne.jp/~vtj-yagi/vts15.htm> (確認 : 2014.05.24)